

womanてらす



裂織

(青森県)

昔は布を擦り切れるまで使い尽くし、どんな小さな端切れも捨てませんでした。役目を終えた布を手で引き裂き、再び織って新たな布として活用したのが裂織です。東北では青森県や岩手県などで、女性の手仕事として伝えられてき

古布再生する手仕事

ました。

かつてはこたつ掛けや衣類になりましたが、現代に合わせ和服の帯を提案しました。写真は青森県の職人が作ったもので、材料の古布は留め袖や紬などの古い黒地の着物。それを細く裂き、パッチワークにも見えるつづれ織りにしました。スクエアな織り柄がとてもモダンです。

黒といってもさまざま黒があり、その微妙な違いが織りなす色調がこの帯の魅力です。裂いた布はよらずに織るため、ほつれた糸の感触が残るのも裂織ならではの味わい。それが使い込むほどにしなやかに柔らかくなり、手や体になじんできます。

裂織の帯は思いのほかコーデ

ネートしやすく、おしゃれ着などに幅広く対応できます。艶のある着物に合わせると、マットな帯が引き立ち、艶のないものにも静かになじんでうれしくなります。小物に青や赤の色を利かせるのも新鮮。写真のように黒のお召しとの組み合わせは大胆で究極ともいえますが、白に黒の1本線の帯締め、そして茶の帯揚げを一緒に合わせるとシックな装いとなります。

「経糸は女の建前、緯糸は女の気持ち」。亡き裂織の職人が教えてくれた言葉です。口に出せない胸の内を織り込んだからこそ、時を超えて人々の心を打つのかも知れません。東北の厳しい風土で、暮らしの知恵として生まれた裂織を誇りに思っ身に着けたいの



帯は青森県の裂織、着尺は山形県の白鷹ちりめんお召し

です。

(田中陽子・「暮らしのクラブゆずりは」店主)

〈第4金曜日掲載〉